

馬場宏二著

『宇野理論とアメリカ資本主義』

(2011 御茶の水書房)

中山 弘 正
(PRIME 客員所員)

「宇野理論」が、ケインズ等の「近代経済学」と大きく対立する「マルクス経済学」の流れの方に位置すること、さらにその「マルクス経済学」の中での、「講座派」系—どちらかという共産党系—と「労農派」系—どちらかという(前)社会党系—では、後者にやや近いとしても、ほとんど独自の人脈を成してきたことは相当広く知られていることであろう。そして宇野弘蔵氏が提唱したマルクス『資本論』を、「経済原論」という相当に抽象度の高い理論レベルに位置づけつつ、レーニン『帝国主義論』などを「段階論」として、「現状分析」である例えば「日本経済」等々の実態分析に三段階で迫ろうとする独自の「方法論」が、その「宇野理論」の大まかな内容だということも、かなり知られているといってもよからうか。

もちろん、大きな「世代」間の関心と認識度の差異があるのは言うまでもない。何しろ、「宇野弘蔵先生没後30年記念研究集会」がもたれたのが2007年12月のことである。今日の、諸大学の学部生にも、大学院生にとってさえも、宇野弘蔵氏の話や、声を、直接に聴いた人はいないであろう。私自身は、「60年アンボ」といわれている1960年の日米安全保障条約反対の相当大規模な国民運動が興っていた時期に、大学の上級生、という世代であった⁽¹⁾。2010年代の学生諸君が、この書評の私の文章をここまで読んだとしても、ピンと来るようなことは何もないかもしれないし、それは

私自身にとっての「明治時代の、この頃にはなあ」などというその世代の方の話が聴けたとしても、全くピンと来ないのと同様であろう。

だがともかく、私が東大経済学部生、大学院修士課程期(2年間)の学部のスタッフには「宇野理論」の強い影響を受けた方々が沢山おられたし、博士課程兼助手を過ごさせていただいた法政大学にも、東大を定年になられた宇野弘蔵氏その方が(学部は異なったが)居られ、学内にも宇野学派の強力な論客が何人も居られるという時代であった。

馬場宏二氏は、宇野学派の重鎮、大内力氏の演習生のお1人で、私の5歳上の先輩である。私が学部演習生であった頃、その勉強会などにチューターとして来て下さったりした、という方でもあった。しかし、その頃、馬場氏はすでに「アメリカ経済」の研究者として頭角をあらわしておられたし、個人での処女大作『アメリカ農業問題の発生』は、1969年に刊行されたのである⁽²⁾。

宇野理論がアメリカを取り扱っていないわけでは無論ない。しかし、宇野「段階論」でのアメリカの評価は、イギリスとドイツの取り扱いに比較して不十分であり、社会主義が世界的にひたすら拡張していくという宇野氏の子想とは逆に、ソ連邦は1991年に崩壊したし、そもそも、アメリカ資本主義がこれほど大きな力をもつようになるとの予想もなかったのではないか…これが本書のタイトルの意味であろう。

本書は500頁に及ぶ大著である。19章に及ぶので、章名は省略する。しかし、いくつかずつの章をたばねて、4つの部に分けられている。各章の内容はほぼ既発表の論稿である。

- 第1部 宇野理論の歴史化（8章）
- 第2部 発展段階論とアメリカ（5章）
- 第3部 経済学史断片（4章）
- 第4部 過剰富裕化論の徹底（2章）

こう並べると「本書中唯一の書き下ろし」とされている第5章以外のものを、適当に分けて、並べたに過ぎないと思われるかもしれないが、全然そうではないのである。読者の1人としての私は、この大著を拝読して、実に巧妙に「起承転結」がこの4部構成に貫徹していることを感じた。すぐ後で、内容のごく一端を直接に紹介もするが、章の数とは必ずしも関係なく、第2部が本書全体のざっと半分、すなわち、500頁のうちの約250頁を占めており、「ニューディール」時代から、「レーガン」大統領期、そしてまさに現在の「世界大恐慌の再来？」までのアメリカ資本主義を実証分析した本書の中軸を成す部分である。その前に置かれた第1部は、宇野理論そのものを多面的アプローチで検討している。まさに、この2つの章で、本書のタイトルの主要部分をカバーしているわけである。第3部は、学説史的側面に転じて問題を検討し、第4部は、著者の積極的な、現代資本主義は「過剰富裕化」しているという年来の主張を明瞭に前面に押出し、現代資本主義自体も「自滅」していくと結論していく。私は、この部分は、まさに『聖書』で言えば最後の黙示録の部分に当たる、と解釈している。「過剰富裕化」した人類は、それによって食いつぶされ、消費し尽くされる資源の中で、類的な「消滅」の時を迎えなければならない。その現実性を考えると、本書は真に恐るべき1書なのである。

内容を簡略にだが、紹介していこう。

第1部

宇野先生の「文体がわかりにくいことは定評」があるが、「それは、論理の頭抜けた高度さと、古さとカン在所産である。」（6頁）「原理論」にも「段階論」にも、「現状分析」にも、飛躍、空白などが多い、「にもかかわらず、構図全体のもつ魅力と示唆は否定しようがないし、あちこちに、今考えても新鮮な卓見が惜し気もなくちりばめられているのである。」（7頁）（以上、第1章）宇野先生は、1947年、創立間もない東大の「社会科学研究所」に迎えられたが、50年間で所員経験者約170～180人（著者の馬場氏はその1人）として、その中で「社会科学」を表題にした論文を書いたのが6点もあるという宇野氏を越す者はいない。（9頁）「自負や使命感や律儀さを窺わせる健筆である」（13頁）（以上、第2章）宇野氏が初めて『経済政策論 上巻』を出されたのは1936年だが、「ロシア革命直後の世界史像、多くの知識人が共有した、次は社会主義社会だ、との展望が重な」ったものであった。が、その後60年以上経って、ソ連という国権社会主義体制は崩壊し、「世界社会主義化の展望は消滅し、アメリカ発の猛猛な資本主義が無制約に拡大して、諸文化・社会と地球上の自然を破壊し続ける。」（18頁）「もう一つの遺伝子的制約」が「イギリス中心史観ではアメリカ帝国主義の特異性が掴めない。」という点である（20頁）。著者は「宇野段階論を大段階と呼ぶ」、そして、「小段階論」として、(a) 古典的帝国主義段階、(b) 大衆資本主義段階、(c) グローバル資本主義段階、とすることを提唱する。そして、アメリカ帝国主義、経済・社会の特質などを論ずる。（以上、第3章）「解説 段階論をめぐる研究会記録」（第4章）、「新資料との遭遇」（第5章）と、余り知られていなかった史料を示した後に、2人の経済学者との対比が論じられる。「宇

野弘蔵と東畑精一」(第6章)、「矢内原段階論と宇野段階論」(第7章)である。後者は、宇野「段階論」の検討として、また、矢内原氏の経済学の検討として、評者にはとりわけ興味深く感じられた⁽³⁾。そして、『『経済政策論』の成立』(第8章)が、まさに宇野理論をとりわけ個性的なものにしている「段階論」の内容として、「宇野の読書歴」や「宇野の講義ノート」なども確認しつつ、追求されていく。

第2部

「ニューディールと『偉大な社会』」から始まるが、この章だけで約100頁。「前史」で、「自助主義(フロンティアを擁する資本主義、移民と多民族国家、アメリカ民主主義)」という特徴を先ず論じ、救貧の系譜(原型、19世紀州への集中と抑制…)、社会保険の系譜(労災保険の「成立」、健康保険の欠落、老齢年金の渋滞、失業保険の思想)が解明される。次いで「ニューディール」(1935年社会保障法の成立、社会保障の定着、ニューディールの成果と限界)が論じられていく。そして「偉大な社会」(漸進もしくは停滞、再改革の抑止因と起動因、「偉大な社会」の展開)。「端的にいつてしまえば『偉大な社会』の過程が極端に錯綜したものになったのは、老齢問題と黒人問題との異質な2つの問題を、貧困問題として同時に処理せざるを得なかったからである。…黒人問題は、アメリカ史に独自のいわば原罪である。根は深く、現れ方は多様である。…」(第9章)第2次大戦後に移り、「レーガン主義の文脈」を読みといて、深い。「上からの革命と下からの革命」で「黒人問題は奴隷制の負の遺産であり、インディアン殺戮と並ぶアメリカ史の原罪」(214頁)で「福祉爆発」、母子家庭扶助などがとり上げられ、「バラ色の減税」では、減税も「福祉をふやすと税が上がり、その金はろくに税を払わない黒人をうるおし、無駄と不道德を助長する」と

の「白人中間層大衆の論理」(221頁)も指摘される。減税要求は「77年以後爆発し、他の後ろ向きポピュリズムと合流してレーガン主義をおし上げる最大の原動力となった。」(222頁)「強いアメリカ」を主張する「軍備拡張」には彼レーガンは成功した。そして、この「悪しき政治的現実主義」者は、「アメリカを軍拡にひきずった。」(229頁)。こうして彼は「反福祉・反ニューディール・反『偉大な社会』」を端的に現わす提案をしたのである(236頁)。こうした結果、連邦財政は2000億ドルの赤字を出した(240頁)。「それでも、アメリカの民主政治には健全なところがある。…さすがに歯止めがかかった。」(244-245頁)。「事態はいくぶん宗教的でもある。…高齢でも、保守的で安心でき、楽天的でなくさめとはげましを与えてくれる、強い大統領としてのイメージをもつレーガンに、人びとは心を寄せたのである。」(248頁)(第10章)。アメリカ資本主義の歴史的特質、投機性、は近年ますます顕著である。(257頁)「フロンティアの存在と投機性」という「根源的な投機性」があり、「企業売買」が日常茶番化していた。鉄道建設も「アメリカ社会の投機性と多面的にかかわっていた。」(265頁)。「金融資本成立過程の投機性」という点では、宇野説じしんが、過小評価しているほどである。(270頁)「企業買収の四つの波(金融資本成立期の合併、ウォール街の大暴落、コングロマリット形成、M & A)」が検討され、「アメリカ政府の認識」が論じられる。史上現れた社会で、アメリカは「最も徹底した商品化社会を実現し、投機的社会を形成した。…過剰商品化社会が現出している」(282頁)(第11章)。馬場氏は「古典的帝国主義・大衆資本主義・グローバル資本主義の新3段階」という構図を提案する(292頁)。「単独覇権国化」であり、基軸産業はIT産業、支配的資本形態は株価資本主義であろう(293頁)。この新しい基軸国アメリカの特質(298頁以下)は、本当は全文紹介したい。しかし、

敢えて見出し並列のみでいけば、先住民絶滅と土地剥奪の「原罪」、そのゆがみから来る「強迫症成功志向」、その「成功」の連続が「自賛史観」で、「神に選ばれし民の宗教的幻想が重なる。」(299頁)「潜在的差別」、「階級性」(301頁)。同じ延長上に「経済的特性」も見出しだけを並べれば、「高成長」「産業特性」「投機性」「証券化」「株式制度」。そうして、アフガンに侵入し身を滅ぼしたソ連と異なり、「生産力的余裕を持つアメリカはヴェトナム敗戦を対中接近で取り繕い、自由主義的反動の中で、軍事的IT化によって単独覇権国となった。」(308頁)そして、「文明の衝突」という「宗教戦争」を重ねてきたのである。(310頁)「分析課題」の内容までは紹介するゆとりがないが、「構造的特質」、「助走期間」、「資本蓄積(株価資本主義、グローバル化の効用、IT化の効用、対米集中、ドルの信認)」が展開され、大変充実した現代アメリカ経済分析がしめくられていく。「もう一つ大ドル保有国日本。ここは軍事的対米依存以上に心理的対米崇拜国である。」(332頁)。補論で中国経済が若干論じられるが、「外質依存を含むグローバル資本主義下の、共産党主導本源的蓄積過程である。」(334頁)と歯切れよい。「中印ともに本格的な工業国として並び立つことがあるとすると、それは人類のみならず地上の諸生物の破滅である。」(334頁)(第12章)。2008年「秋にリーマン・ブラザーズが破産した。アメリカで堆積した金融不安がここで爆発し、世界経済を襲っている。100年に一度の危機と騒がれているが、09年にはGMが破産し、80年前の大恐慌の再来かと世界中が怯えている。」(341頁)宇野弘蔵の『恐慌論』など「恐慌理論」、「強烈な投機性を示す過剰商品社会」の「アメリカモデルへの切り替え」を論じた上で「世界恐慌の条件」を検討する。そして「2008年に至る2・30年の社会状況が、80年前の過程とかなりよく似ていたと」も想起される。「世界経済の基軸は、共に証券投機資本主義

国アメリカ」だし、「共にアメリカで金余りを生じている」し、「冷戦勝利感と安堵感」、「政治的保守化の進行」があった。しかし、2つの時期の違いは、今回はかつてほど「ウォール街の株価暴落に収斂しなかった」し、「多方面に拡散していた。」(351頁)この問題の内容はさらに追求されていく。「崩壊の可能性」、「大恐慌の世界史的意義」が論じ進められ、「恐慌の人類史的意義」で締めくくられる。この結論は、著者の持論である「過剰富裕」状態の「先進資本主義諸国側で消費水準を現在の三分の一程度に切り下げるか否か」にかかっており、もしそれが出来れば「環境破壊に至る期間は来世紀初めくらいまでは伸ばし得よう。そしてその延長期間に、人類は如何なる制度のもとでなら永続し得るか、そもそも永続すべきか、といった根本的な問題を考える時間が得られる。」(360頁)そして、「経済成長という熱病」が完治され、「それ自身発熱源である戦争や原子力発電は当然禁止されねばならない。」(360頁)フクシマ(3・11)を体験した日本への予言的警告でもあろう。(第13章)

第3部

Homo economicusの探索、から入り、経済学の古典を書いた人々、マーシャル、ベティ、をはじめ、シュムペーター、パレートなどが探求され、Entrepreneurも追求される。ハリス、フランクリン、スチュアートと広がり深まる。(第14章)そして、ジェームズ・スチュアートについては、その「国際経済論」が詳しく追求される。(第15章)『近代日本の社会科学』著者アンドリュウ・バーシェイ氏を迎えてのシンポジウム報告であるが、日本資本主義論争の知識社会学、山田盛太郎の講義ぶり、も組み込まれている。(第16章)資本主義と言う用語を、主題、その用語の出現(仏、英、独、露)、その普及、と展開する。(第17章)

第4部

「経済成長」という「もともと学術用語ではない」語を巡っての再考から入っていく。用語史から、「イデオロギーとしての経済成長」に進み、「成長の限界」で「労働力商品の供給」から、持論の「過剰富裕化」へと展開し、「破局？」で「社会的神経症化の進行」「道徳的にも能力面でも神たり得ない人類が、神の杖だけを入手してしまった。これがIT化における過剰富裕化である。…地理上の発見による近代資本主義形成の500年、産業革命による工業化社会形成の200年、そして「経済成長」を国際是としてから半世紀。現代の人類は、一万年近い人類史を、自らの欲望による環境破壊の結果として、自ら閉じようとしている。…罪なるかな経済成長、である。」(464頁～466頁)「経済学者達は、骨の髄から『経済成長』に汚染されている。」10年あまり前、「過剰富裕化」をキーワードとする「体系を纏めた」—『新資本主義論』(1997年)を指す—が、「これに対する経済学者達の反応は驚くべく冷淡だった。…圧倒的に多いのが、無視、冷笑。…実際彼らは、経済成長を至高善としたあらゆる経済問題の解消とそれにサヤ寄せする思考様式を刷り込まれており、純理論的にも拡大再生産の世界でこそ均衡があり得ると事実上思い込んでいる。その世界で、経済成長は滅びの途だと叫んだ者を、彼らは、愚かな小悪魔だと冷笑したに違いない。…」(466頁)「今の日本は、政府も社会も、もはや経済成長を望み得ない地点にいることを自覚すべきである。成長しなくても生活水準は過剰富裕状態に」ある。(468頁)(第18章)本書の最後を飾るのは「資本主義の自滅—過剰富裕化のツケ」であり、「究極の資本主義批判である」という宣言から始まる。この批判は「逆説的でありかつ根源的である。」(474頁)あらためて、「先進資本主義国」で「エンゲル係数30%以下、乗用車普及度所帯数の約半分、1982年ドル換算で、1人当たりGDP5000ド

ルの生活水準」(475頁)という「過剰富裕」の基準を確認した上で、「資本主義はおそらく21世紀中に消滅する」(477頁)。過剰富裕化の昂進→自然環境・社会・種としての、徹底的破壊→近代文明の崩壊と人類の滅亡→担い手の消滅による資本主義の消滅—が「極めてありそうな、必然の経路」で、「これよりは望ましいが、実現不可能な経路」の方に「人類存続の可能性」を挙げる。消滅の論拠として、「思想史の出発点」、「原理的根拠」、「歴史的根拠」とたたみ込まれ、付論的に「環境破壊の現在」(この中には、原発問題も具体的に指摘されている)、「人間そのものの劣化」が指摘され、「資本主義が、万能薬としての経済成長を通じて世界規模の過剰富裕化を惹起し、その結果、人類の滅亡を通じて自滅するのが殆ど必然だと言える。」(486頁)(第19章)

本書はただの「警世の書」ではない。マルクス経済学でも高度な水準を誇ってきた「宇野理論」に立ちつつ、歴史も含めたアメリカ資本主義の現状分析を中心として、更に世界経済の歴史・現状分析に、深く広い業績を積み重ねてきた学究の、真剣な警世の書なのである。

「過剰富裕化論」は、そこでもキータームといってもよいと思うが、意外なことに、「これを体系化した『新資本主義論』への反応が、私が一番期待した宇野派の若手からは全くなく、支持があったのは医師や絵本作家や保母といった、生身の人間を相手にする非経済学者」であったという(423頁)。本当に意外なことだと思う。「2011年3月11日」以後でさえもこうした状況は全く変わらないのであろうか。

ほとんど、例外的であった、という「過剰富裕論支持者」の中の1人に、「大内演習の後輩でソ連経済専門家中山弘正(詩誌『河』111号、1997年12月掲載の、短文ながら極めて鋭敏的確な書評)」(430頁)と加えて下さっていることが、評

者にとっては大変な喜びと誇りである。「医師や絵本作家や保母といった、生身の人間を相手にする」方々と、共通性があるかなと考えてみると、自分なりに、全く納得がいく。私自身の、日常的な最も強い関心は、「生命」である。それは生身の人間に宿るとともに、拙評でしばしば引き合いに出した「黙示録」など『聖書』の中心テーマでもある。そもそも、「オイコノミア」とは生きた人間の「救済の摂理」のことだというのではないか。

しかし、社会主義も共産主義も、宇野理論が期待していたであろうほどにも期待できないことははっきりしてしまった現在、しかも同時にアメリカやEUが世界資本主義を先導するといっても、それが人類を「救済」どころか、こちらも「破壊」への道かと判りはじめて来たとき、この「今」と

いうときを真剣に反省せしめる本書が少しでも多くの人に学ばれるといいと願わずにはいられない。

注

- (1) 江刺昭子『樺美智子 聖少女伝説』（文芸春秋、2010年）が、その時期に大学生であった者たちにとっての、この時代の雰囲気的一端を伝えている。
- (2) 馬場宏二『アメリカ農業問題の発生』（東京大学出版会、1969年）
- (3) 拙稿「矢内原忠雄氏の社会科学方法論」（拙著『学院の鐘はひびきて』ヨルダン社、1996年所収）参照。